

長利 仲聴（おさり・なかあきら）

1、プロフィール

弘前市にある熊野奥照神社や岩木神社宮司を務めたが、国学者であり、旧派の歌人。津軽一円の歌会を指導し、多くの人々に影響を与えた。

<生没>

1823(文正6)年 10月28日 ~ 1903(明治36)年4月22日

<代表作>

外崎則守編『三師の面影』

<青森との関わり>

文政6年に弘前に生まれる。弘化2年に藩命によって江戸に上り歌道を学ぶ。帰藩後は神職と歌道普及に尽くした。

2、作家解説

桜園と号した国学者で歌人。文政6年、弘前熊野宮神官長利仲良の子として生まれた。幼少の頃から岩木山神社主阿部仲昌や藩学問所和学士斎藤規沖らに神学や和歌を学ぶ。やがてその和歌の才能が11代藩主津軽順承に認められ、弘化2年に内命によって江戸に出て海野遊翁に入門。さらに、公家で歌人だった千種有功に歌学を学んだ。

明治2年、学問所(藩校稽古館のこと)皇学士取扱となり、3年に助教皇学掛となる。3年、藩命により、神祇道改革について学ぶために再度上京し、神道学者で国学者の平田鉄胤に学び、多くの歌人らとも交わった。

仲聴は、神職に就くかわら多くの和歌を作り、「開文雑誌」や「田舎新誌」などの地方雑誌に発表したほか、中央でも『明治花月歌集』『明治歌集』『千代田歌集』などにも選ばれているが、特に『明治歌集』第2編の跋文を書くなどのその実力は高く評価されていた。また、地方では下沢保躬や大道寺繁禎をはじめ多くの人々を指導したが、和歌結社就将吟社を結成してその指導にあたるなど、津軽一円の

旧派の各歌会指導に力を尽くした。更に、俳諧の最後とも言える『雪の曙』の序文も書いているし、優れた書道力を生かして多くの書作品や碑文も残している。

なお、自ら熊野宮を熊野奥照神社と改めたり、岩木山神社宮司としても力を尽くすなど、その方面での活躍も顕著であった。